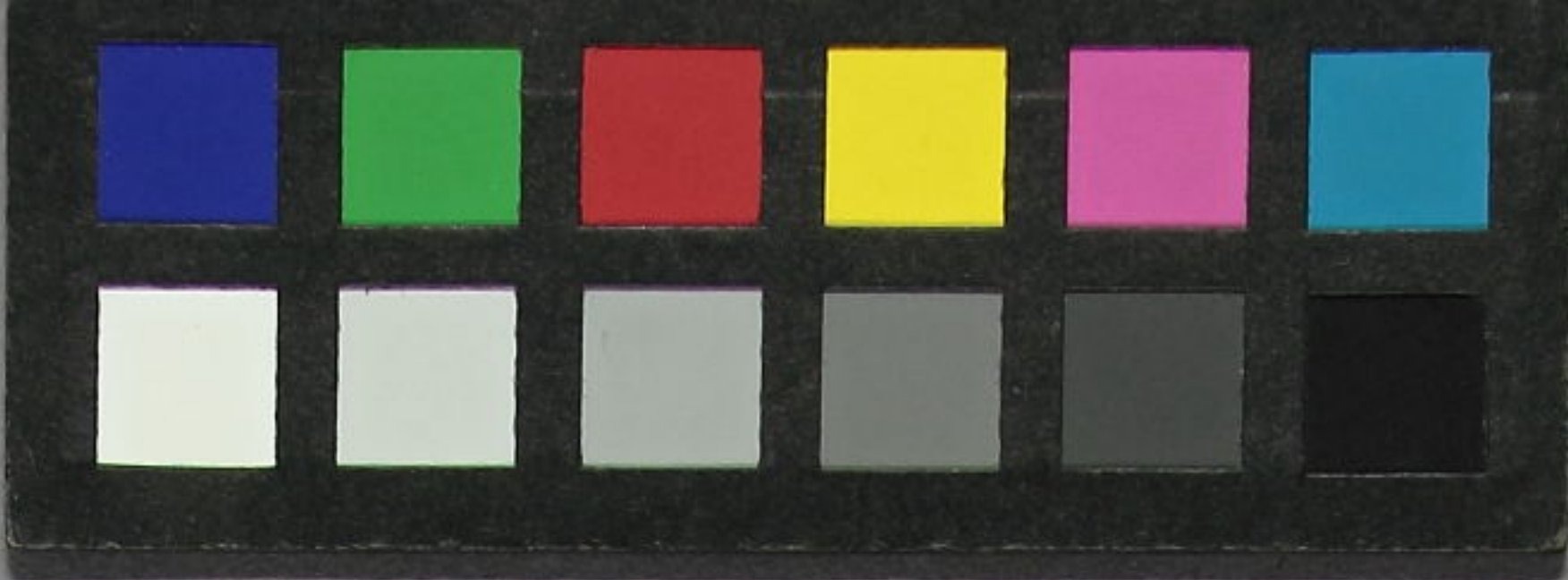




河勢牧方辺の太百柱の娘もあといふ年
十九のつづきの花ふと無常の目あり失せし
擲筭ちら着物まで立派ながら埋葬せし
其夜娘が門の戸叩く家内はさうと出
来ありと騒ぐ小娘はさうと母は
私に棺の内で蘇生をせよと
元の主ふたつを思ふ頭若い衆
蓋をひけしふ手を出し
さうと云ふと云ふと云ふと云ふと
戻つて来ると云ふと云ふと云ふと
助け男が知と知算定めん掛念
實の着物小眼ぐれて心の欲の紛れ
免しといふ詮を命の親と相談のい實
の河原のへんげ地造りつりの嫁入る
讀うと喜二号、詳也 狸昇記

大錦色紙
六号



河勢牧方
太百柱

河勢牧方
太百柱

河勢牧方
太百柱

